

2024年9月8日（日）「御旨は分からずとも」

ヨブ 2:1-10

1 またある日、神の子らが来て、主の前に立った。サタンもまたその中に来て、主の前に立った。
2 主はサタンに言われた。「あなたはどこから来たのか。」サタンは主に答えた。「地を巡り、歩き回っていました。」
3 主はサタンに言われた。「あなたは私の僕ヨブに心を留めたか。地上には彼ほど完全で、正しく、神を畏れ、悪を遠ざけている者はいない。あなたは私を唆し、理由なく彼を滅ぼそうとしたが、彼はなお完全であり続けている。」
4 サタンは主に答えた。「皮には皮を、と言います。人は自分の命には、すべてを差し出します。
5 あなたの手を伸ばして、彼の骨と肉を打ってごらん下さい。彼は必ずや面と向かって、あなたを呪うに違いありません。」
6 主はサタンに言われた。「では、彼をあなたの手に委ねる。ただし、彼の命は守れ。」

7 サタンは主の前から出て行き、ヨブの足の裏から頭の頂まで、悪性の腫れ物で彼を打った。
8 ヨブは土器のかけらを取って体をかきむしり、灰の中に座った。
9 彼の妻は言った。「あなたは、まだ完全であり続けるのですか。神を呪って死んでしまいなさい。」
10 しかし、ヨブは彼女に言った。「あなたは愚かな者が言うようなことを言う。私たちは神から幸いを受けるのだから、災いをも受けようではないか。」このような時でも、ヨブはその唇によって罪を犯さなかった。

【序論】

今日はヨブ記2章より、病の問題について考えてみたいと思います。私たちの中で誰一人として、一度も病気に罹ることなく一生を送れる人はいないでしょう。しかし、病気を経験することは必ずしも悪いことではなく、乳幼児期に様々なウイルスに感染することで免疫を身につけているとも言われます。成長に伴い、麻疹、水疱瘡、りんご病、おたふく風邪など、ほとんどの人が通らなくてはならない道があります。それに加え、季節性の風邪やインフルエンザ、アレルギー性鼻炎など、年中悩まされるものも出てくるでしょう。現代の日本においては、アトピー性皮膚炎に罹る率が高くなってきていますが、その原因の多くは知らず知らずのうちに体内に取り込んでしまっている食品添加物や残留農薬にあると言われます。それを治すために薬を使用することで、今度は薬の副作用の問題へと発展することも多いです。歳を重ねると、高血圧、糖尿病、腎臓病、癌といったいわゆる成人病との付き合いも出てくるかもしれません。私自身も多くの病気を経験してきましたが、皮膚の問題についてはおそらく一般的な人の何倍もの苦しみを味わってきたと思います。今日のヨブ記の記事は、決して人事とは思えない内容です。

【本論】

本論1. サタンの次なる提案

またある日、神の子らが来て、主の前に立った。サタンもまたその中に来て、主の前に立った。主はサタンに言われた。「あなたはどこから来たのか。」サタンは主に答えた。「地を巡り、歩き回っていました。」主はサタンに言われた。「あなたは私の僕ヨブに心を留めたか。地上には彼ほど完全で、正しく、神を畏れ、悪を遠ざけている者はいない。あなたは私を唆し、理由なく彼を滅ぼそうとしたが、彼はなお完全であり続けている。」(2:1-3)

ここでは再び「天の議会」が開かれており、そこにサタン(告訴人)も同席しています。ここでのサタンと神とのやりとりの内容は1:6-8とほぼ同じですが、「主の前に立った」という句が加えられているのが印象的です。サタンを主体として次の計画が実行に移されていくことを強調しているのでしょう。第一回目の災いに対してヨブが立派に反応したことについては、サタンは何もふれていません。神の側が彼の正しさを証言し、サタンの主張が間違っていたことを指摘しています。ヨブについて言われている「完全」(תָּמִים/ターム)とは、単語の意味としては「完全」「健全」「倫理的潔白性」などですが、神が人間としてのヨブの弱さを認識していないということではなく、彼が自分の欠点を認めながらも神に依り頼む生き方を貫いていることを誉めているのでしょう。事実、彼は自分のすべての持ち物が取り去られても、それを与えてくださった神に栄光を帰したのです。

サタンは主に答えた。「皮には皮を、と言います。人は自分の命には、すべてを差し出します。あなたの手を伸ばして、彼の骨と肉を打ってごらん下さい。彼は必ずや面と向かって、あなたを呪うに違いありません。」(2:4-5)

4節に出てくる「皮には皮を」ということばは、当時よく用いられていた諺と思われるが、意味が分かりにくい。おそらく、物々交換の際に動物の皮をそれと同等の価値ある物と引き換えるときに使われた表現だと思われるが、もう少し丁寧に学んでおきましょう。原文では「עוֹר בְּעוֹר יִעָוָר」(ヨール・ベアド・ヨール)なのですが、前置詞「בְּעוֹר」をどう取るかで理解が変わってきます。「בְּעוֹר」には「～通して」「～の後ろに」「～の周りに」「～の代わりに」という意味の幅がありますが、この中から意味が通りそうな二つの解釈を取り出して比較してみましょう。

「～の後ろに」……人の心は皮の後ろにまた皮があるので、本心は分からない

→ヨブの敬虔の裏には更なる下心があるに違いない

「～の代わりに」……誰でもより良い皮のためなら手持ちの皮を差し出すだろう

→自分の皮膚(命)を守るためなら神への敬虔を引き換えに差し出すだろう

私的には後者の方が意味が通りやすいような気がします。「人は自分の命には、すべてを差し出します」というサタンのことばに照らしてみるならば、ヨブはまだ最終的なもの(命)を保有しているのだから、自分の体/命のためなら神への敬虔を捨てるだろうと言っていることになります。これは踏み絵のイメージと似ており、信仰を保つ者は肉体的に苦しんで死ぬが、信仰を捨てれば解放されるという、究極の選択が迫られていることになります。主はこの度もサタンの挑戦をお受けになりますが、ヨブの命を奪うことはお許しになりません。

本論 2. 第二の災い

サタンは主の前から出て行き、ヨブの足の裏から頭の頂まで、悪性の腫れ物で彼を打った。
(2:7)

ヨブにもたらされた病を正確に特定することは難しいですが、本書の中に出てくる彼の証言に基づいて、どのような病気であるかをある程度読み取ることができます。

- ・ 私の肉は蛆と塵の塊をまとい、皮は固まっては崩れる。(7:5) …皮膚の化膿
- ・ しかし、あなたは夢で私をおののかせ、幻で私をおびえさせます。(7:14) …悪夢を伴う
- ・ 彼の射手は私を包囲する。彼は私のはらわたを切り裂いて容赦せず、私の胆汁を地に注ぎ出す。(16:13) …激痛を伴う
- ・ 私の骨は皮膚と肉に張り付き、皮膚と歯だけでしのいでいる。(19:20) …激痩せ
- ・ 夜が私の中から骨をえぐり取り、私の痛みはやむことがない。(30:17) …24時間続く痛み
- ・ 私の皮膚は黒くなって剥げ落ち、私の骨は熱で焼ける。(30:30) …高熱を伴う

天然痘や象皮病ではないかという説もありますが、症状がピタリと一致するわけではありません。いずれにせよ、皮膚の疾患というものは生き地獄ともなり得るもので、私自身も生きていること自体が苦痛だと思ったことが何度もありました。顔から足の甲まで広がる炎症、皮膚の突っ張りによる痛み、悶絶するような痒み、落屑と膿、引っ搔いたことによる出血、集中力の欠如…と、挙げればきりがありません。

ヨブは土器のかけらを取って体をかきむしり、灰の中に座った。(2:8)

「灰の中」とは、集落の入り口にあったゴミ捨て場のことで、そこには土器のかけら、動物の糞や死骸なども捨てられたそうです。災いに遭った者はそのような不衛生な所に座り、万が一伝染病であった場合のことを考えて人を避けたとも考えられます。ある注解者は、体を搔きむしることは悲しみの表現だと説明していますが、私の経験上、皮膚がそのような状態になった場合、悲しんだり誰かを恨んだりしている気持ちの余裕はなく、ただただ苦痛を耐えることしかできなくなります。ヨブが体を引っ搔いていたのは、とにかく痒かったからでしょう。血まみれになりながらも搔かずにはいられない彼の状況が目に浮かびます。

本論 3. 妻の勧め

彼の妻は言った。「あなたは、まだ完全であり続けるのですか。神を呪って死んでしまいなさい。」(2:9)

ヨブの妻のことはここにだけ記録されています。夫とともにすべての財産と子どもを失うという経験をし、更に夫の健康まで奪われてしまった。幸せの絶頂期に突如として降りかかってきた災いに、ただの自然的な現象ではないと感じ取っていたと思います。ポロポロになった夫の姿を遠目に見ながら、神がヨブを裏切り、見捨て、呪われたのだときえ思っていたことでしょう。神に捨てられた(と思われる)のに尚も神を信じ続ける夫の生き方を、妻は理解することができませんでした。

ここでは「呪う」という訳語が出てきますが、原文ではそのような言葉が使われているのではなく、「祝福する」を意味する「בָּרַךְ／バーラク」である点も指摘しておきたいと思えます。これは1:5で「もしかすると子どもたちは罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない」と言われていたのと同じ言葉です。祝福と呪いは真逆の言葉ではありますが、ヨブ記の著者が「呪う」という激しい表現を使いたがらず「祝福」に置き換えたのではないかと考えられています。少なくとも、ヨブの妻のことば全体から、「もはや完全であることをやめなさい」「死んでしまいなさい」という究極の勧めがなされている以上、良い意味のことが言われていないのは確かです。

それにしましても、ヨブの妻はどのような意図でこのことを夫に語りかけたのでしょうか。彼女のことばの背後には、何となくサタンが潜んでいるように感じるのです。サタンの目的は、ヨブの敬虔が偽物であることを暴くところにあった。妻は、ヨブがどんな悲劇に遭っても神の顔を立て続けることが理解できませんでした。自分の家族よりも、自分の体よりも、神の方が大事なのか。神に対する敬意というより、むしろ恐怖があるのではないか。言いたいことも言えず、黙して苦しみ続けるだけの人生を送るのが夫にとって果たして良いことなのか。むしろ、生きることをやめた方が彼にとって良いのではないか。神に対して一言ものを申し、いっそのこと命を絶ってしまった方がラクになれるのではないか。彼女の真意は分かりませんが、いずれにせよ彼女はヨブの信仰が「転ぶ」よう促したのです。最も身近な人からの進言は、ヨブにとってある種の誘惑であると同時に、受け入れ難いものでもありました。

しかし、ヨブは彼女に言った。「あなたは愚かな者が言うようなことを言う。私たちは神から幸いを受けるのだから、災いをも受けようではないか。」このような時でも、ヨブはその唇によって罪を犯さなかった。(2:10)

ヨブの品格ある返答に注目しましょう。彼は妻に対してさえ「愚かな者よ」と言うことはなく、「あなたは愚かな者が言うようなことを言う」と優しくたしなめています。彼は、妻の辛い立場もよく理解していたのです。しかし、彼のことばの中に「災いを受ける」という表現が含まれているのを見落としてはなりません。神学校で旧約概論を受講していたときに、講師の先生が「ここにヨブの信仰の揺らぎがある」とおっしゃっていたのを覚えています。この時の先生の意図を十分理解できぬままここまで来てしまいましたが、言わんとするところは、ヨブの中に「神は祝福だけでなく災いをももたらす方だ」という疑念が生じ始めているということでしょう。実際に災いをもたらしたのはサタンでありましたが、それを許容されたのは神でした。神は間接的にこのことに関わっておられるとも言えるのです。これまでのヨブの人生において、神は正しい関係にある者に対してただただ祝福をもたらしてくださる方であった。しかし、今やその神観が崩れ去ろうとしていた。神は「正しく生きようとする者」にさえ災いを下される方なのだ。「このような時でも、ヨブはその唇によって罪を犯さなかった」とありますが、見方を変えるならば、ここに彼の忍耐が限界に達していることを感じ取ることができます。

【結論】

神はご自身と正しい関係にある者にさえ災いを下されるのか（災いが下ることを許されるのか）。これは難しい問題です。それでは、そのような神を信じる意味とは何なのかということになってくるでしょう。事実、この神義論のところではつまずいている多くの人がいることも知っています。しかし、私はそれでも尚、神を信じ続けたヨブの信仰に倣うことができると思っています。神の御心の深いところまでは人は分からないからです。災いが許容された先にどのようなご計画があるかということまで、私たちには見極めることができません。最終的に神がすべてのことをどのように裁かれるかということは、人の目には終わりの日まで隠されているのです。すべてが聖なる目的の下にあるということだけは確信を持って語るができるでしょう。ヨブが依り頼んだのは、自分の思いや理解をはるかに超えた神の御旨でありました。私たちにとっても、今世界で起きている諸々の出来事の意味は分からないことばかりですが、最終的に神がそれらをどう取り扱われるかを見届ける日が来ることを信じて歩んでいます。分からずとも、神との契約関係に留まり続ける、それがヨブが信仰の模範として聖書読者に示してくれたことではないでしょうか。

【祈り】

深い御旨をもって歴史を導き給う、天の父なる神様。この世界には多くの悲しみが存在し、たくさんの涙が流されています。なぜこんなことが起こるのかということが、私たちの身近にも存在します。その意味は今では理解できませんが、あなたの内には聖なる御旨があることを信じます。ヨブのように、それでもあなたに信頼し続ける信仰に立たせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人の思いを超え、聖なる目的をもって世界を治め給う、父なる神の愛、
神の救いのご計画のため、苦しむことをよしとされた、主イエス・キリストの恵み、
世の荒波に揉まれながら、尚も神に信頼する道を選ばせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。